九州大学教授
高木幸二郎著

〔訂正版〕

貨幣

―その理論と歴史

有信堂刊

九州大学教授 高木幸二郎著

〈訂正版〉

貨幣

―その理論と歴史―

有信堂

貨　幣　〔訂正版〕

1961年11月1日　訂正版第1刷発行
1975年6月30日　訂正版第13刷発行

著　者　　高木幸二郎
発行者　　増永勇二

印刷・南保印刷　　製本・石橋

発行所　有信堂
東京都文京区本郷5丁目30—20（東大前）
電話（03)813-4511(代)・振替東京141750
（郵便番号113—91）
京都支店　京都市左京区百万遍（京大北門前）
電話（075)781—3652・振替京都23523
（郵便番号 606）

・定価はカバーに表示してあります

序　言

貨幣論を標題とする著書は、その標題が經濟學の一般學徒にとつて極めて親しみ深いものであるにも拘らず、特に終戰後の日本において意外に尠い。これは一つには今日多くの大學において貨幣論が金融論の一部として講義されていることにも因るが、他方にはまた終戰後の日本の貨幣問題がその現實的背景から多くインフレーション問題に集中され、主としてインフレーション論として展開されることが多かつたためと、またいわゆる新しい經濟學の陣營において貨幣本質論を缺くケインズ『一般理論』の流行にも因るものと思われる。資本主義社會における貨幣現象は勿論金融現象一般と區別されて存在するわけではないし、雇傭や所得の問題と切離し難い形で結び付いていることもいうまでもない。

しかしまた、貨幣は資本主義社會の最も基本的な構造的條件をなしており、貨幣なくして資本も賃銀も利潤もそして利子も考えられないからこそ、それは經濟學の最も基本的な獨自の「範疇」であり、資本主義的生產樣式研究のための一般的基礎となつている。金融現象一般はこの基

本的範疇の發展せる諸形態に外ならない。貨幣の本質に關する明確な理解なくして貯蓄と投資の研究は無意味である。インフレーションもまた貨幣現象の基本的體系とその論理的序列の把握によつて位置付けられないかぎり、その研究は徒花に終るであろう。そしてそのことが何人にとつても當然自明である筈であるに拘らず、貨幣の基礎理論體系の展開に近年において著しい進歩が見られたとは言い難いと思われる。

本書は元來大學における講義用教材として適當な貨幣論著書の多く見當らないと思われるままに、既成のノートに新たな書き下しを加えて印刷に附したものである。その叙述は、舊制と新制の交替途上の今日の課程を考慮に入れ、新制大學の學生諸君が金融論に入る前階程として貨幣論を學ぶという段階を目標としつつ、なるべく平易に、かつ最も基本的な事項の説明を主とする樣式をとつた。從つて本書は從來の貨幣論體系の上に特に新たな研究業績を加えることを意圖したのではない。ただしかし私自身の考えでは、現代における經濟學のある意味での不毛は、個別的研究業績よりは何よりも先ず體系的な視角における停滯にあると思う。その意味では本書の構成は私自身がかねがね考えているところによるべく努めて見た。すなわち本書はこれを二篇に別ち、第一篇は基礎理論の體系とし、第二篇は金本位制の歴史の叙述に當てた。これは古くから存する

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

貨幣理論と貨幣制度論の大學講座式區分を排して、理論は制度および歴史と切離しえないこと、そして近代の貨幣現象の論理體系の研究者は同時に近代の貨幣史を學ばずしてはその研究と理解の十全を期し難いことを示そうがためである。本書では便宜上それは二つの篇に區分したが、兩者が一體的のものとして把握さるべきであることは本文の叙述によつて汲み取られうるであろう。

さらに各篇の體系について若干敷衍するならば、先ず第一篇の基礎理論の部分においては、貨幣の理論を資本主義社會の内在的矛盾の爆發としての恐慌との關連において總括したことである。貨幣理論の展開においてこの關連を欠くならば、如何に勞働價値説に基礎付けられ名目主義の批判に鋭くとも、その體系は平面的であり形式的であつて、「批判の武器」としての理論の意義は薄れざるを得ないのである。次にまた第一篇第三章の「貨幣形態の發展」は多く信用貨幣論として展開されているものに該當するが、ここでは國際的信用貨幣としての外國爲替と、その基礎に存する國際收支と金の運動を附加えた。古典的典據に從つて多くの進歩的貨幣論體系が貨幣機能論において「世界貨幣」を取扱つているにも拘らず、資本主義的生産と流通の一層具體的な「一層高い段階に屬する」形態規定においては、このような體系上の一貫性が缺けているのである。これによつて本書の基礎理論の體系は、なお全く資本主義社會の貨幣現象の基本構造を示し

たにすぎないに拘らず、世界貨幣としての金の運動が投げ與える今日の最も具體的な切實な課題に迫りうる緒口を提示したつもりである。恐慌は究極的には世界市場恐慌として把握されねばならないことは古典的典據の早く明示したところであり、その教訓の大恐慌以後の今日ほど深刻緊切に感ぜられるときはなかつたにも拘らず、恐慌の基礎理論そのものもこの視角からの體系的把握の進展は充分でないと思われる。私は他の機會にその問題を取上げたいと思うが、ここでは具體的な恐慌の一つの不可避的な前提としての信用と特に信用貨幣につき、これを世界貨幣との体系的關連において把握し、貨幣機能論における世界貨幣と恐慌論における世界市場恐慌との體系的一貫性への示唆を併せて試みたつもりである。この基礎理論の國際的信用貨幣を含む全體系の包括的立場においてこそ、それは世界史として把握さるべき第二篇の金本位制の歴史への論理的連續性も保證されうると思われる。といつても本書では利子生み資本の運動、利子率に關する說明は一切省かれている。それは貨幣論を信用論あるいは金融論一般から區別して展開しようとした本書の制約上已むを得なかつたところである。そのかぎり右の第三章における「一層高い段階に屬する」體系の展開も一つの抽象的斷面でしかない。しかし同時にそれは信用論一般における包括的な世界市場的體系の展開を豫想していることを附言したい。なおまた本書は勿論入門書で

あり解說書であることを意圖しているが、この面においても第一篇では從來の類書の存在に拘らず、一つの存在意義はありうるであろうと思つている。貨幣本質論の主內容をなす價値形態、そして商品流通、通流貨幣數量等、これらについては本文を參照されたい。

第二篇の金本位制の歷史は、前に一言した見地から單に年代紀的あるいは國別貨幣制度史としてでなく、金本位制の確立こそ世界的體制としての近代資本主義的生產樣式の確立と支配の完成の過程であるという基本的命題を前提としている。この立場からすれば、イギリスに始まる各國金本位制の普遍化の叙述には、十九世紀資本主義の發達史とその各國別の歷史的特性における基本的な契機の摘出がその裏付けに與えられなければならないが、この點について著者の經濟史的智識の未熟のため殘念ながら殆どその意圖は實現されえていない。殊に早く金本位制を單獨採用したイギリスに對して、最後まで複本位制に執着を殘したフランスの關係をこの面から見直すことは十九世紀經濟史上の一課題であろうと思われる。これらは特に經濟史家の敎示に俟ちたい點である。しかし第二篇においても、その今日の世界貨幣體制との關連、また日本自身が今日おかれている地位から、アメリカの金本位制成立の沿革と一九三〇年以降のその特殊的形態と地位をやや詳しく取扱つたこと、また金爲替本位制の如き金本位制の變形と獨占資本主義と一般的危機

との關連を明確化しようとしたこと、そして國際通貨基金において價格の本位の意義が今日國境を越えた現實性を有つに至つていることの象徴的表象が與えられていることを指摘しようとしたこと等は、その叙述内容の不充分さに拘らず著者の意圖は酌んで貰えるものと思う。そして最後に今日の形における世界貨幣金の問題のもつ意義が如何に深刻切實なものであり、經濟の領域を超えたものですらあることを諒得されるならば、この歴史篇の差當つての意義は果されるのである。

要するに世界的體系における包括的統一的把握が、理論においても歴史においても今日ほど緊切な課題となつた時はない。それは貨幣論のみならず經濟學のあらゆる部面において、理論の個別的領域における論議の狹隘さから一つの質的飛躍をなさしめ、未解決的對立を止揚しうる決定的契機となるものであることを強調したいのである。今日日本の進歩的學徒の理論戦線に低迷と混亂があるとすれば、解きほぐさるべき決定的な鐶はここにある。學問の領域もまた世界的視野からその立ち遅れを回復しなければならない。Das Wahre ist das Ganze. 部分的瑣末に辯證法の驅使を自負する觀念論者がいつまでもいてはいけないのである。本書が貨幣論の入門書解説書であるに拘らず、さらに進んだ專門的學徒の一顧を期待する所以もここにある。

なお參考あるいは引用諸文獻について一言すれば、第一篇については本書の性質上「資本論」と「經濟學批判」は別として、その他各節末の註に掲げたものは研究者諸君の初步的參考書目掲出の趣旨を以てなるべく少數の著書、それも比較的手に入り易いものを主にして示した。勿論これらの書物以外にそれぞれの箇所で參考必要文獻は多いが、煩を避け一々擧示しなかつた。また第二篇については、史實に關する叙述は主として左記の書物によつた。

E. W. Kemmerer, Gold and the Gold Standard, 1944.

——, Money, 1935.

R. G. Hawtrey, The Gold Standard in Theory and Practice, 1947.

J. L. Laughlin, A New Exposition of Money, Credit and Prices, Volume I The Evolution of the Standard, 1931.

殊にケメラーの最初の著書に負うところは相當多い。これらについて援用箇所は煩を避け一々擧げていない。しかしケメラーの右の著書の如きは終戰後の新着圖書でもあり（もつともその內容は前著"Money"の要約部分も多いが）、說明の基礎にある貨幣數量說的理論の缺陷が著しく露呈している場合は特にこれを指摘しておいた（第三章第二節）。また統計表について若干のものを

W. J. Busschau, The Measure of Gold, 1949. から借りた。

最後に本書の成るにつき有信堂杉田七郎氏の御厚意に對して謝意を表する次第である。

一九五一年九月一〇日

高木幸二郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序言……一
第一篇　基礎理論……一
第一章　貨幣の本質……三
第一節　商品の使用價値と交換價値……三
第二節　交換價値の大いさ……一〇
第三節　交換價値の形態……一六
(一)　單純な價値形態……一六
(二)　展開された價値形態……二〇
(三)　一般的價値形態……二三
第四節　貨幣の成立……二八
(一)　貨幣形態……二八
(二)　分業と私有財産……三四

第二章　貨幣の諸機能……四〇
第一節　價値の尺度……四〇
(一)　價格……四一
(二)　價格の本位……四六
第二節　流通手段……五三
(一)　商品流通……五三
(二)　貨幣の通流……六一
(1)　流通手段の數量
(2)　貨幣通流の速度
(三)　鑄貨と紙幣……七三
(1)　本位鑄貨
(2)　補助貨
(3)　紙幣
第三節　貨幣蓄藏……八九

第四節　支拂手段……九六
第五節　世界貨幣……一〇五
第三章　貨幣形態の發展……一一四
第一節　商業信用と信用貨幣……一一四
第二節　兌換銀行券……一二七
第三節　預金貨幣……一三六
第四節　外國爲替……一四三
(一)　外國為替取引と爲替市場……一四三
(二)　爲替相場……一五三
第五節　國際收支と世界貨幣の運動……一六六
第二篇　金本位制の歴史……一八三
第一章　イギリスの金本位制確立……一八五
第一節　前史……一八五

第二節　金本位法の實施……一九〇
第二章　金本位制の普遍化……一九八
第一節　フランスの複本位制とその崩壞……一九八
第二節　ドイツの金本位制採用とその影響……二〇四
第三節　アメリカ合衆國における金本位制……二一〇
附　その他諸國
第三章　金本位制の變形……二三一
第一節　金爲替本位制（フィリッピンの事例）……二三一
第二節　第一次世界大戰後の金爲替本位制……二三七
附　金塊本位制
第四章　金本位制の崩壞……二四一
第一節　第一次世界大戰後の金本位制とその短命……二四一
（一）金本位回復の經過……二四一

(二) 復活金本位制の短命……二五〇
第二節 アメリカ合衆國金本位制の變質とその國際的作用……二五六
第三節 第二次世界大戰後の金本位制の運命……二六八
(一) 國際通貨基金……二六八
(二) 金の獨占と國際インフレーション……二七九

第一篇 基礎理論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com